

新刊
紹介

Books are the quietest and most
constant of friends; they are the most
accessible and wisest of counsellors,
and the most patient of teachers.

「同志社教会九十年小史」 京都・同志社
教会、B6判一四七頁、非売品。

本書は同志社英学校開校の翌年、明治九年十二月三日に新島先生自ら仮牧師として設立された同志社教会が、創立九十周年記念事業の一つとして出版したものであり、来るべき百年史編集のための基礎資料の性格を持っている。

百四十七頁の小冊子ながら、(その前身である)西京第二公会の設立、同志社教会の設立、その歩み、教会人物誌の四章よりなり、その「栄光と苦難」の歩みはすなわ

ち同志社の栄光と苦難の歴史と表裏一体であることを読者に強く印象づける。明治二十三年宗教と教育の衝突による宣教師団の引揚げ、横井社長時代の徴兵猶予にからむ同志社綱領一部削除問題、原田総長時代の紛争のため一年二ヵ月にわたり「同志社に総長なく、教会に牧師なき」空白状態の現出、戦時の官憲軍部の圧迫と僅か三名の出席者による礼拝式維持の苦心などはその例である。

学園教会としての戦後の各種活動の詳細な紹介は、学園と教会との関係すなわち社長の牧師兼務、総寮長兼宗教主任の協力、牧師の宗教主任兼務、牧師の校長兼務等を経て現在の専任牧師組織までの経緯の記述とともに、「自由教育自治教会、両者併行国家万歳」なる理想の学園教会の在り方について読者の一考を促がしている。

日本プロテスタント教会史に大きな足跡を残した当教会のより一層の発展を期待するとともに、百年史のため、記事の精粗について更に推敲を重ねられ、新資料を付加し、誤植の絶無を期せられんことをのぞんでやまない。

(仁井)

土倉祥子著「伝評・土倉庄三郎」 東京・朝日テレビニュース社、A5判二八〇頁、定価一、〇〇〇円。

新島襄先生が同志社英学校創設後、更に大学設立の理想に燃えていた明治十三年の冬、始めて会った人物であったが、先生の理想に共鳴して即座に五千円寄附を約したのが、大和大滝村の土豪土倉庄三郎であった。以来両者の間には信頼と敬愛の親交が続けられ、先生は学園はもちろん家庭の重要事項についても土倉に相談し、土倉もまた子女の教育については一切先生の力にたよるといふ深い交渉の続いていることは先生の書翰や年譜によって明らかであるが、その土倉庄三郎の評伝がこの書である。

著者は庄三郎翁の次弟平三郎の孫、土倉梅造夫人祥子女史で、土倉家伝来の資料をもとに執筆したもの。一部聞き書きもあるが、昭和三十六年の春二ヵ月にわたって『大和タイムス』紙に連載したものを原に修正加筆し、土倉庄三郎翁五十年祭の記念の意味をふくめて上梓したものである。

土倉家は吉野の奥に代々林業を営み、明

治初期の頃は吉野郷の材木方大総代の役をもち、吉野川の改修・熊野街道の修築その他の公益事業に私費を投じて郷土の開発に力を注ぎ、更に教育事業にも熱心で、庄三郎翁は郷土に私学校を興し、また同志社、日本女子大学の設立に対して多額の金品を提供して人材育成の業を助け、一方板垣退助、景山英子、金玉均ら自由民権運動の闘士、志士にもパトロンとして援助した先覚具眼の夫子で、当時山林王として、その資産は全国長者番付に三井財閥と併列して置かれたという。

書中「同志社専門学校」の一章があり、新島先生の書翰や日記を資料に庄三郎翁との交渉を記述している。先生の遺墨の中に「深山大沢生龍蛇」の句があるが、土倉庄三郎こそ当時の吉野における一龍蛇であったといえよう。

巻末に同郷人森庄太郎の著作「挿絵吉野林業全書」が庄三郎翁の校閲になる跋文と共に縮写で合冊され、その林業に対する識見の一端がうかがえる。本書に考証的伝記の要求を満すことは出来ぬかもしれぬが、山谷に忘られて行く一先覚者の事蹟を掘り

起こすようですがはなるであらう。

(小野)

ア・イ・シフマン著、末包丈夫(経済学部教授)訳「トルストイと日本」朝日新聞社、B6判三〇九頁、定価四五〇円。

東京、ついで、大阪でのトルストイ展を期して、末包丈夫教授訳出の「トルストイと日本」が公刊されたことは、大きな慶びである。

原著「トルストイと東洋」は、一九六〇年モスクワの東洋文献出版所から出されたもので、著者、シフマンは、国立トルストイ博物館(モスクワ)主任研究員であり、かれには、トルストイ関係の数多くの論文や著書がある。

「トルストイと日本」は、序章、トルストイと日本、トルストイと中国の三部からなり、巻頭に、「日本の読者へ」という、シフマンのことばをかかげている。

百年を迎える日本の近代の歩みのなかで、日本人のいだったトルストイ像は、いくたの屈曲を経験しながら生きつづけた。元来、東欧社会のもった社会思想は、西欧のその移殖・流入に比較して、まさると

も劣らぬものをもっていたが、その接触・交流に関する両者の文献、資料の調査・検討は、相互交通の立場におかれることがなかった。それが言い過ぎならば、きわめて乏しかった。そうした意味からすると、シフマンの「トルストイと日本」訳出は、その時点・時点における、いくつかの対話々と対応の諸様相をはじめて公開し、とくに、明治期の文学・社会思想の骨格構成におけるトルストイ像のもった意味を示唆的に提供してくれる点できわめて大切である。また、日中近代化の比較研究の見地からも、「トルストイと中国」は、教えられることがきわめて多い。とくに、魯迅の像を見定める上での魯迅の抱いたトルストイ像は、当時の日本と中国の文学界の動向を検討する上できわめて示唆的である。

同志社人としては、小西増太郎、徳富蘇峰・蘆花・深井英五、安部磯雄など著名な人々が交流史上大きな役割を果していることを、いま一度反顧してみることをすめたい。

(杉井)

「ある私学」 京都、同志社大学生協出版部、B6判二九一頁、定価四三〇円。

慶応、早稲田紛争の余燼もまだ消えやらぬうちに、昨年もまた中央大学、明治大学で学園紛争がもちあがっている。いずれも伝統ある私学であり、慶応に至っては、今日まで、ほとんど学生運動が存在しなかった大学である。それらの大学が、学園の存立をかけたまでの深刻な学園紛争をくりかえし、しかも、有効な対策がうちたてられないうちに、今日に至っている事態は、いわゆる「私学危機」と呼ばれるものが、実に多様な問題を含んでいる事の証左であろう。

そして現在、多くの大学論、私学論が提出され、それぞれに話題を呼んでいるが、この「ある私学」も、そうした私学論の一つではある。だが、多くの類書がともすれば、既に第一線を退いた教育評論家による私学論、あるいは、ルポーター・ジュによるスケッチ風の問題点指摘型の大学論であるのに対して、本書は大学論を現場にひきもどし、解決可能な方策を何とか見つけ出して行こうとする野心的な試みを行なっている。

る。

第一章入学試験、第二章学生サークル活動の周辺、第三章学生主任多忙までの章では、マンモス化し、ますます疎外されている学生とのかかわりあいを通して、学生と教師のヒューマンな結びつきをもとめている。

第四章教授会の憂鬱、第五章ああ就職、第六章大学教育の転換軸を求めて、では、さまざまな難用に追いまくられて、ともすればゆるみがちな「研究」体制の問題、更には、一般教育と専門教育の問題等、具体的な改革案も含めて、積極的な問題提起がなされている。

最後の「ある戦後派教員の履歴書」の中では、いろいろ取ざたされている学校制度の問題を著者自らの経験に照らした実感的学制論として展開している。

この書を一読して感ずるのは、学生に対する愛情・学生ぬきで大学は語れないという、著者たちの意志が大きく貫かれていることである。この、教育と研究に対する真剣な取組み、研究を志さず人々への深い信頼感が、この書の読後感を非常にさわやか

なものにしている。また、筆者がすべて同志社で教鞭をとる人々である関係から、文中資料として、主に同志社の事例が念頭におかれているようだが、文章全体は、一般にどの私学にも存在する問題として整理され、客観的に記述されている。(浅川)

杉江栄一・太田雅夫著(法学部講師)

「政治学ノート」 京都・法律文化社、B6判三〇二頁、定価七八〇円。

本書は、政治学の入門書であり、教科書である。政治学者が、おのの自分の政治学を展開するにあたって独自の教科書をもつことは、政治学の発達の現状においてはむしろ望ましいことかもしれない。何故なら、政治学は、その体系において、一応の基本的ワクが存在するとはいえず、個々の学者の独自の体系を展開し得る余地が多いからである。その意味で数年間の講義を背景にして、若い二人の学者が協力して一書をものさたことに賛意を表したい。自分たちの体系と理論的水準を公にし、大方の批判を受けて、更に高いものをうみだす一歩ともなろう。

教科書として書かれた本書には、教科書

としての特徴点がある。一つは巻末に付された各章別の参考文献目録である。読者も本書の内容を理解する上で大いに役立つと思われる。二つは、同じく巻末の、政治学史―政治史年表である。参考文献目録は従来の教科書にも多くみられるが、この種の年表はみかけたことがない。本書の大きな特徴点である。更に特徴と思われる点を指摘すると、個々の問題の説明にあたって、解答を示すのではなく、問題の所在を指摘したり、問題を提起するような形にしているところが散見されることである。教科書は提起したすべての問題について何らかの解答を示し、したがって、教室で棒読みしてもよいものとの考えからすれば、右の点は欠点とみえるであろう。しかし、教科書にむしる学生に問題を提起し、考えるきっかけをあたるものとすれば、右の点はきわめてすぐれた特徴点となろう。

しかし、こういったすぐれた特徴点を形成しているものの中にも、もう少し親切的配慮のほしかった問題点が二、三あるように思われる。たとえば、国家の歴史的範疇をあげているが、社会主義国家がその中に

はいつていたように思われる。それを半国家として描いてはいるが、成立以来すでに半世紀の歴史をもち、今なお、その死滅の時期と条件とを全く予測しえないと指摘する以上、歴史的範疇としての国家に入れなかった納得のいく説明がほしかった。このためか、国際政治の章がせつかく国際関係を論じながら、社会主義諸国家間の関係が論じられないままに終っている。著者が立論の基礎にしているマルクス主義政治学の観点からすれば、社会主義諸国家間の関係を科学的に理論化することこそ当面の課題であろう。そのための問題提起だけでもしただきかった。

国家論についていえば、著者は、例外国家という概念を提示し、それを絶対主義国家に対応させている。この考えに、従来マルクス主義政治学の中で、疑問なく是認されている考えであるが、問題は多いようだ。階級国家観から純論理的に考えれば、例外という限り、非階級的となるのは当然であり、絶対主義国家のように、支配階級の在り方が特殊であったにすぎないものならば、例外と名づける必要は全くない、と考

えられる。

更に、現在のブルジョア国家体制をわれわれはどのように評価したらよいのであるうか。特に、その中心的イデオロギーであるデモクラシーとその制度についての、その歴史的評価の問題である。デモクラシー、特に、マス・デモクラシーの歴史的評価は、マルクス主義政治学の、分岐点である。この点について、私の読みちがえてなければ、一方では否定的側面を強調し、他方では、肯定的な側面をむしろ強調しているように思われる。少々のとまどいを禁じ得ない。この両側面の評価をつらぬく視点が示されているとそれも解消しよう。これは、政治的社會の未来を展望するにあたって重要な点であるのでお二人の著者の一層の討論を期待したかった。最後に、できれば、後日、お二人がそれぞれ独自の著書をものにし、それぞれ独自の体系を示していただけるよう期待したい。

(金丸)

× × ×